

アートで伝える国連海洋科学の10年

糸魚川フォッサマグナミュージアム 学芸員 香取拓馬

1. はじめに

ジオパーク活動の目的は、特徴的な地質遺産とそこに息づく生態系や育まれてきた人々の歴史と文化を保護・保全し、それら地域資源を教育・防災・地域振興等へ活用することにある。糸魚川ユネスコ世界ジオパークは、2009年に日本で初めて世界ジオパークに認定された地域のひとつであり、世界的にも珍しい島弧形成（日本列島誕生）の物語をまるごと楽しむことができる地域である。そのダイナミックな地殻変動は、当地域に3,000m近くの高低差を生み出し、多種多様な動植物の生息地となっている。この海と山が近い特異な地形は、生態系・災害・環境汚染など、山-川-海の相互関係を理解するのに適したフィールドであるといえる。

新潟県糸魚川市にあるフォッサマグナミュージアムは、地球や日本列島の誕生に関する地質標本等を展示した博物館である。1994（平成6）年に開館し、2015（平成27）年に大規模リニューアルを行なった。糸魚川ジオパークが発足して以降、当館は糸魚川ジオパークの中核施設として位置付けられ、教育活動及び交流人口の拡大に貢献してきた。2020（令和2）年には、地域ESD活動推進拠点に登録され、市内外の教育機関に質の高い教材を提供している。

2. 国連海洋科学の10年とは

2020年に開催された第75回国連総会の中で、2021年からの10年間を「国連海洋科学の10年」と位置づけ、持続可能な開発目標（SDGs）のターゲット14にもある「豊かな海」の実現に向けた取組をさらに推進していく方針が合意された。地球の表面の約70%を覆う海には、100万種類以上の生物が生息しており、人の暮らしと密接に関わっている。一方、海の中、特に深海域の生態系及び発生している諸現象には未解明の部分も多く、こと一般の方にとっては身近に感じづらい対象である。国連海洋科学の10年では、科学者、漁業関係者、地域住民をはじめとする全てのステークホルダーを結ぶプラットフォームの創出を大きな活動理念としている。



国連海洋科学の10年が掲げる目指すべき7つの海

2021年11月、日本ジオパークネットワーク（JGN）は、「国連海洋科学の10年に向けたキックオフイベント ～海洋ゴミ問題 in 隠岐ジオパーク～」を開催し、「国連海洋科学の10年におけるJGN取組宣言」を発表した。これは、持続可能な開発目標（SDGs）の中でも、特にネットワーク活動による解決が求められるターゲット14「海の豊かさを守ろう」への取組を推進するものであり、ジオパークの強みを生かせる世界的潮流である。

3. 企画展「海のアート展」

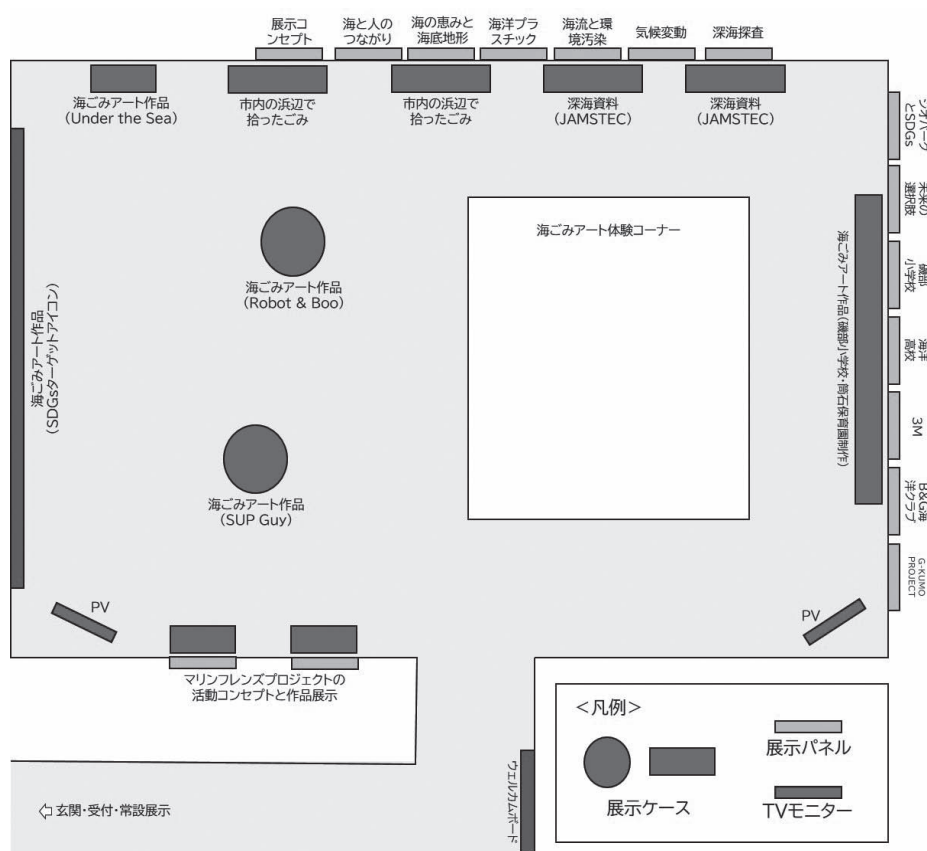
上記の背景を踏まえ、海洋プラスチックをはじめとする環境問題の周知を目的とした企画展「海のアート展」を開催した。

<企画展概要>

会 期：令和4（2022）年7月2日（土）～同8月31日（水）

会 場：糸魚川フォッサマグナミュージアム 研修室

来場者数：27,438人（期間内来館者数から算出）



フォッサマグナミュージアム企画展「海のアート展」展示レイアウト

本企画展のメイン展示は、市内の浜辺で集めたごみから制作したアート作品（海ごみアート）である。海ごみアートを制作したのは、市内の環境保護団体「マリフレンドプロジェクト」の創設者であるリアン・スプラット氏。オーストラリア出身のリアン氏は、糸魚川の自然に惹かれ、数年前に移住してきた。毎日の日課である散歩の際、浜辺に打ち上げられるごみが気になるようになり、ごみを拾い集めるようになった。さらに、身近な環境問題をより多くの方に知ってもらえるよう、集めたごみでアート作品を制作し、SNS で発信するようになった。彼女の活動は少しずつ拡がり、地域のギャラリー展示、オリジナル絵本の出版と市内の小中学校への無料配布など精力的に活動が続けている。筆者は、彼女の海ごみアートに込めた想い、アートが持つ訴求力に感銘を受け、コラボ企画展を発想するようになった。

会場入り口左側の壁でひと際目を惹くのは、SDGs の 17 のターゲットアイコンである。そのあまりに精巧な作りに“絵”だと思う人が多いが、近づいて見るとペットボトルのキャップやプラスチック製の容器でできていることに気付く。これらの作品は全て海ごみアートである。アート作品にどのようなごみが使われているのか、SDGs のターゲットアイコン 1 つ 1 つと向き合う時間を生み出す仕掛けとなっている。



糸魚川市の浜辺で拾ったごみで制作した SDGs の 17 のターゲットアイコン

会場入り口右側には、市内小学生が制作した海ごみアートと、SDGs に取り組む市内の団体（学校・企業・スポーツクラブ）を紹介したパネルを展示した。身近なステークホルダーの取組を知ること、観覧者に自分でもできる具体的なアクションを想像してもらう仕掛けとなっている。

展示物の一部は、国立研究開発法人 海洋研究開発機構（JAMSTEC）から借用した。探査船や深海生物に関する展示の他、糸魚川沖の深海映像展示も行った。糸魚川の特産品であるベニズワイガニ（深海 1,000m 程度に生息）、そこに散乱するタイヤやプラスチック製袋の映像は、普段見ることができない身近な海の中も環境汚染が進行している現実を観覧者に伝え、海洋研究の面白さと深刻な環境問題を広く周知する展示となった。

会場の中央部には、海ごみアートを体験できるコーナーを設置し、子どもたちに楽しく環境問題を認識してもらった。また、制作した作品の SNS 発信を促すパネルを用意し、より身近な人が環境問題について発信する機会を提供した。身近な人の取組を見ることで、環境問題を自分事として考える訴求力が増すことを狙った展示である。



フォッサマグナミュージアム企画展「海のアート展」展示物。

- ① 市内小学生が制作した海ごみアートと SDGs に取り組む市内の団体を紹介するパネル。
- ② 海洋探査に関する資料と深海映像展示。
- ③ 海ごみアート体験コーナー。
- ④ 海ごみアートを体験する様子。

4. 関連する活動

1) 市内小学校との教育連携

本企画展では、将来世代に残したい未来の海をひとつのテーマとしている。そこで、市内小学校と連携し、身近な海の現状を知り、見たい未来の海を考え、自分たちにできることを発信するための特別授業を開催した。現状を知るステップでは、小学校の前に広がる浜辺のごみ拾いを行い、どのようなごみが流れ着いているか調べた。外国語で書かれたごみも多く、自分が捨てたごみが海外の浜辺を汚してしまう可能性があることを認識してもらった。未来の海を考えるステップでは、集めたごみをきれいに洗浄し、「自分が見たい未来の海」をテーマに海ごみアートを制作した。発信するステップでは、小学生が制作した海ごみアートを企画展で展示し、そのキャプションに未来の海について考えることを書いてもらった。



市内小学校との教育連携。① 小学校前でのビーチクリーン。② 海ごみアート体験授業。

2) 企画展「海のアート展」オープニングセレモニー

企画展初日、会場前でオープニングセレモニーを開催した。

日 時：令和 4（2022）年 7 月 2 日（土）9:00-10:00

会 場：糸魚川フォッサマグナミュージアム

出 席：糸魚川ジオパーク協議会会長、糸魚川市教育委員長、
リアン氏（展示海ごみアート制作者）、地元小中学生

開幕にあたり糸魚川ジオパーク協議会会長からは、「海は世界と繋がっている。ごみのないきれいな海を実現するためには、世界中の人々が協力し合うことが大切」と挨拶した。出席者が着用している T シャツには、私たち 1 人 1 人の「i」を、環境問題への取組や行動「action」に繋がたいという思いを込めたキャッチフレーズ「iAction」がプリントされており、企画展の開催期間中、会場内のショップで販売し、売り上げの一部を環境保全活動に活用した。オープニングセレモニーの後には、リアン氏と小学生による作品紹介が行われ、作品に込めた思いを多くの方に届けた。



オープニングセレモニーの様子。① テープカット。② 小学生による海ごみアート作品紹介。

3) 記念講演会

企画展の開催を記念し、海洋学者をお招きした講演会を開催した。

日 時：令和 4（2022）年 7 月 30 日（土）13:30-15:00

形 式：会場とオンラインのハイブリット開催

会 場：フォッサマグナミュージアム ホール

講 師：原田 尚美（海洋学者、東京大学教授、第 60 次南極地域観測隊副隊長）

演 題：北極の温暖化と新潟の豪雪の意外な関係

参加者：会場 25 名、オンライン 18 名 / 計 43 名

国連海洋科学の 10 年の推進でも活躍される原田氏。北極・南極での観測経験を生かし、研

研究者目線で考える国連海洋科学の 10 年についてご講演いただいた。近年問題になっている北極海の海水減少により、北海道でも鮭が獲れなくなる可能性や、シベリア高気圧が今より南下することで新潟を含む北陸地方の積雪量が増加する危険性などについて丁寧に解説していただき、気候変動がとても身近な問題であることを実感する機会となった。



記念講演会の様子

5. まとめ

企画展「海のアート展」では、海ごみアートを通じて国連海洋科学の 10 年及び SDGs の理念の普及啓発を図った。普段から耳にする機会の増えた SDGs だが、その中で掲げられる世界的な課題に対して自分の考えを持ち、実際の行動に繋がられる人はあまり多くない。まずはそれら課題の状況を認識する、向き合う時間を生み出すという点において、アートの訴求力はとても高く、本企画展の目的である普及啓発は達成できたと感じている。

“認識”から具体的なアクションの実行へと観覧者をステップアップさせるためには、世界的課題を自分事に還元するプロセスが必要である。ひとつの方法として、観覧者にとって身近な人の取組を展示物に組み込むことが挙げられる。本企画展では、市内の団体（学校・企業・スポーツクラブ）の取組を展示パネルで紹介した。これは、自分にもできる具体的なアクションをイメージする助けとなり、国連海洋科学の 10 年で重要視される全てのステークホルダーの巻き込みに繋げることもできる。

また、企画展パネルの中には、海流と漂着ごみの関係性を示すため、日本各地のジオパークから漂着ごみの現状を報告してもらい展示パネルとして活用した。地域間を結ぶ“海”の課題認識及び解決に向けた取組には、ジオパークネットワークの活用が非常に有効であると実感した。今後も、国内外のジオパークネットワークを最大限に活用し、地域のあらゆるステークホルダーと共同した博物館活動を継続していくことが重要であると考えている。

関連サイト

国連海洋科学の 10 年にける JGN 取組推進宣言

<https://geopark.jp/jgn/education/20211113.html>

企画展「海のアート展」特設 HP

<https://fmm.geo-itoigawa.com/blog/umiart-sdgs/>

本事業は、日本財団「海と日本 PROJECT 2022」の助成を受け実施しました。